



心と体と葛藤と エリクソンの発達モデルから

「小学校では特に話を素直に聞けるようにしておかないといけないと思っている」ある小学校の校長先生が話していた。中学校への接続という意味で感じたことだという。

エリクソンの発達理論では、学童期（小学校時代）には「勤勉性の獲得（あるいは成功）」が重要課題だという。校長先生が言っているのはこのことにあたる。勤勉さが成功すると物事を完成させる力とその喜び、周囲の承認、自己有能感や自尊心の獲得につながる。これらには、この時期、学校における仲間集団が、その子の社会化の力を養う上で重要な存在となっていくというのはご存じのとおり。



「エリクソンは語る—アイデンティティの心理学」
R.I.エヴァンズ著 新曜社

一方、中学生は青年期（前期）にあたる。第二次性徴という生理学的変化と社会的な葛藤とによる混乱の時期で、新しい自我同一性（自分がどんな人間か）を確立することが課題である。青年は同一性（identity）の確立を目指して試行錯誤しながら、やがて自分の生き方、価値観、人生観、職業を決定し、自分自身を社会の中に位置づけていく。小学校と中学校が、時系列的には連続していながら、決定的に違っているのは、子どもたちの発達の状況が劇的に変化するからに他ならない。中1ギャップが言われて、小中のなめらかな接続のための取組が盛んに行われている。それはそれで効果があると思うし、現状から見て意義深いと思うが、ギャップ自体は、子どもたちの内なるものもあるので、制度的に改革を図っても限界はあると思っている。

さて、私たちがやるべき事は何かだが、生徒の実態に差（精神的に十分発達している者とまだ幼い者）があり、近頃は、心理的な発達の緩やかさが気になる。中学校で勤勉性の獲得の過程を飛ばすのは少々危険で、勤勉さを求める指導を続ける必要もある。が、それでも大半はアイデンティティの獲得を目指す指導へ軸足を移動しなければならない。「生き方」「価値観」「職業」などについて、自分を社会の中に位置づけて考える機会を設けていくのである。道徳や進路指導が重要なのはもちろん、教科の指導においても、少々理屈



っぽいけれど「学ぶ意義」や「ものの考え方」にも触れるべきだと思う。大半の生徒は、特にそういう場面を作らなくても、「自然と」そういうふうになるようになっていく気もするが、全員がそうではないことを経験則で知っている。また、そういった自然と身につけられる生徒にとっても、自分の中の深まりとして正面から考えた体験は大きいのではないと思う。